

四国横断自動車道建設にともなう 埋蔵文化財発掘調査実績報告

昭和 59 年度

1985年3月

日本道路公団
香川県教育委員会

例　　言

1. 本書は、四国横断自動車道建設にともない昭和59年度に実施した発掘調査の実績報告書である。
2. 調査は日本道路公団高松建設所の委託をうけ、香川県教育委員会事務局文化行政課が実施した。

調査組織は下記のとおりである。

総括　課　長	遠藤 啓	調査総括　所　長	石塚徳治
磯田文雄(11.26～)			入江 久(5.1～)
主　幹	林　茂	係　長	伊沢肇一
	松本豊胤	調査担当	文化財専門員 岸上康久
課長補佐	中村 仁	主任技師	廣瀬常雄
庶務　係　長	下河芳樹		池内右典
	宮谷昌之(6.1～)		藤好史郎
主　事	前田和也		真鍋昌宏
		技　師	野中寛文
			薦田耕作
			西岡達哉
		嘱　託	中本雅之
			河野 裕
			片桐孝浩

3. 本書は、各担当者が協議した成果を取りまとめ、伊沢・真鍋が編集した。

目　　次

I 昭和59年度調査概要	1
II 各遺跡の調査	4
金蔵寺下所遺跡	4
稻木遺跡B地区	6
稻木遺跡C地区	8
中村遺跡	10
吉原A地区矢ノ塚遺跡 南部地区	12
西碑殿遺跡	14
道免1号窯跡	16
延命遺跡 城岡地区	18
延命遺跡 八反地地区	20



I 昭和59年度調査概要

四国横断自動車道（善通寺～豊浜）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、昭和58年1月に開始してから2年余が経過した。

今年度は、日本道路公団高松建設所との間で締結した「昭和59年度・発掘調査委託契約書」によって着手した。以来、用地買収の進展、発掘面積の拡大等により、3回の変更契約を行い、最終的に57,900m²の発掘調査を実施した。

調査は、多度郡条里の金蔵寺下所遺跡をはじめ、多度郡条里（稻木B地区、稻木C地区、吉原A地区）、中村遺跡、西碑殿遺跡、深尾遺跡、道免遺跡、延命遺跡（城岡地区、八反地地区）の10ヶ所で発掘調査を実施した。併せ、予備調査も永井地区、吉原B地区、吉原A地区、西碑殿遺跡及び観音寺市に所在する刈田郡条里、石田遺跡、長砂古遺跡、中姫遺跡等で行い、面積を確定した。

善通寺インター建設用地内での金蔵寺下所遺跡の調査は、57年度末からの継続調査で、約2年間を要し、都合17,000m²を発掘した。奈良・平安時代を中心とする遺跡であるが、「斎串」「人形」等の大量の木製品や、方形の掘り方を呈す柱穴群、数多くのU字状を呈す溝状造構など、貴重な考古資料を得た。

国鉄土讃線東西の両サイドに位置する多度郡条里稻木C地区は、条里造構を想定していたが、弥生時代の墳墓・集落が確認された。竪穴式住居跡5棟、それに隣接して、壺棺・壺棺群・集石造構群など、大量の弥生土器と共に検出され、金倉川西岸に営まれた弥生時代後期の遺跡として注目される。西方に隣接して、稻木B地区がある。方形の掘り形を持つ建物群と、真北から30°西に走る溝状造構が検出され、条里造構と想定されるものもあり、丸龜平野の条里を考える上で重要な手がかりを得た。

さらに、西1kmに中村遺跡が所在する。当初12,000m²を予定していたが、一部未買収地や家屋の移転問題が未解決のまゝとなっており、9,000m²を発掘したに止めた。当遺跡は室町時代を中心とする建物群が検出されたが、遺跡の東端近くの、溝から銅印（「貞」と刻印）が出土した。

丸龜平野の西端に位置する吉原A地区では室町時代の集落、奈良・平安時代の建物群、弥生時代の集落が確認されている。発掘予定面積11,800m²のうち、60年度には約7,000m²持ち越すことになる。

善通寺市西端の丘陵とその裾に広がる西碑殿遺跡は、60年2月1日より調査を開始した。一部未買収地やスプリンクラーが縦横に走っている箇所があるが発掘調査は急ピッチで進んでいる。弥生土器の包含層、古代の建物跡が確認されている。

三野町に所在する深尾遺跡と道免窯跡については、59年10月・11月に実施した。道免窯跡は3

地区において発掘した。みかん園の伐開について地元地権者と協議し、収穫までは最小限の面積を発掘することとなった。幸い、窓の主体部は用地外で、灰原は果樹園外において確認出来たので、問題なく発掘調査が終了した。

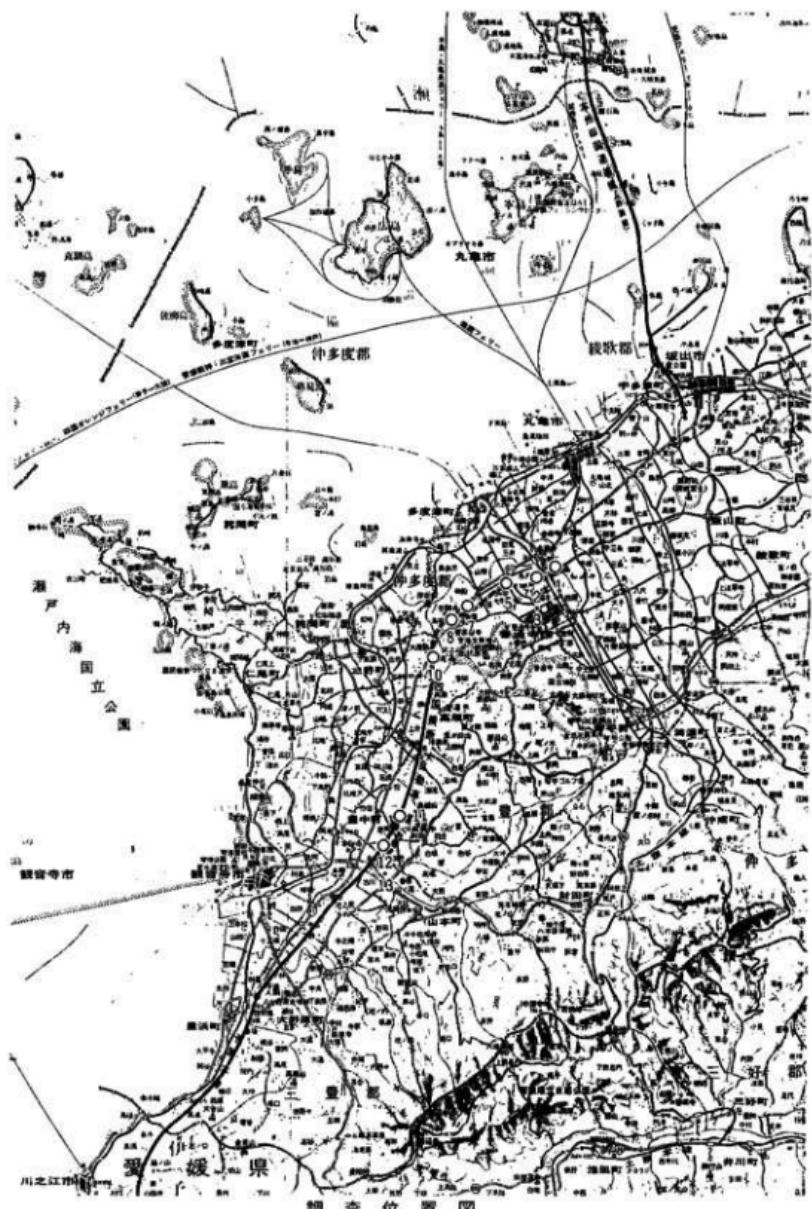
豊中町の延命遺跡では、城ノ岡地区が59年7月中旬で終了。58年11月末に始めて以来8ヶ月を要した。引き続いて、宮川の北に位置する八反地地区で発掘調査を行った。弥生時代末から古墳時代初頭の溝状遺構と、古代末～中世の建物群・井戸跡を検出した。宮川の側道橋架橋工事及び本線の下部構工事用の道路が調査区内を走っているため、再三の付け替え、排土置き場の確保等、公団・企業体との三者協議を行いながら調査を進めることとなった。

予備調査は、8ヶ所について実施した。善通寺地区については、ほぼ用地買収が完了していたので問題なくスムーズに行うことが出来た。が、観音寺地区については、用地買収が遅れているため、公団が立毛補償をすることで了解が得られた箇所を試掘した。調査方法については、59年11月19日（一の谷農協）、11月22日（黒島会館）、11月26日（八丁公民館）に地元対策協議会、日本道路公団、県教育委員会、市対策課の参加を得て説明会を実施し、協力を得ることとなった。調査は、60年2月18日より、3月4日にかけて行った。

今年度は、職員10名、嘱託4名、調査員補助員3名、整理員12名、現場作業員170名の陣容で、都合57,900m²の発掘調査を実施した。発掘調査の能率化、合理化を計り、航空測量や表土掘削に重機を大幅に導入した。そのため、遺跡の性格にもよるが、発掘面積は前年度に比べ大幅に拡大した。

用地買収はかなり進展した。買収地の発掘調査に立入るなり、予想しなかった多くの問題が次から次と出てくる。畦畔・水路・田渡し・トラクター・コンバイン・農耕用運搬機等の進入路の確保等等、これらの問題に対処しながらの発掘調査が続いている。

番号	遺跡名	所在地	調査状況						本調査	
			対象面積	過年度	当初	累積1箇	累積2箇	累積3箇	予備調査	本調査
1	金剛寺下所遺跡	善通寺市金剛寺町	(m ²) 17,800	(m ²) 9,300	(m ²) 400	(m ²) 5,900	(m ²) 7,700	(m ²) 7,700	58.2.1～ 58.3.30	58.4.1～ 60.2.28
2	經木道路B地区	善通寺市福木町	17,100	5,100			6,000	12,000		59.9.17～ 60.2.8
3	福木道路C地区	善通寺市福木町	600		400	3,400	3,400	3,400		59.4.1～ 60.3.30
4	多度郡名張井田地区	善通寺市中村町	33,300						59.10.29～ 59.11.5	
5	中村遺跡	善通寺市中村町	9,000		10,200	9,000	9,000	9,000		59.7.3～ 9.17
6	吉野町名張	善通寺市吉野町	4,900				900	99.11.29～ 99.12.25		
7	吉野町名張里見 A地区(矢ノ坂遺跡)	善通寺市吉野町	8,800			100	4,800			59.10.18～ 60.3.30(休止)
8	西碑殿遺跡	善通寺市福木町	3,600		3,900	3,900	3,900	60.1.17～ 60.1.25	60.2.4～ 60.3.30(休止)	
9	南尾遺跡	三豊市三野町大見	500		500	500	500	500		59.9.11～ 59.10.23
10	道免1号墓	三豊市三野町大見	100		100	100	100	100		
11	四ツ塚2号墳	三豊市三野町大見	1,000	200	200	800	800	800		59.4.16～ 59.5.14
12	延命遺跡 城岡地区	三豊市城岡町上城野	5,000	4,000	400	1,000	1,000	1,000		～59.7.19
13	延命遺跡八反地地区	三豊市城岡町上城野	13,000				6,800	19,000		59.7.19～ 60.3.30(休止)
14	刈田郡半里	觀音寺市半里町	43,100				1,000	2,600		
15	石田遺跡	觀音寺市石田町	17,200					1,200	60.2.18	
16	長砂古跡	觀音寺市佐ノ坂町	11,100					1,200	60.3.4	
17	中郷遺跡	觀音寺市作田町	14,000					100		

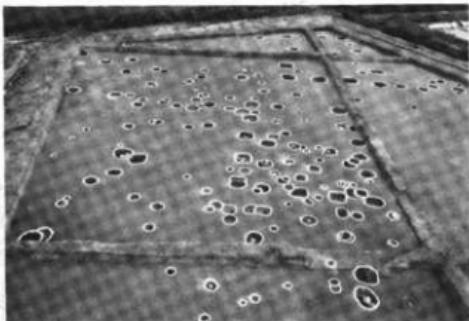


II 各遺跡の調査

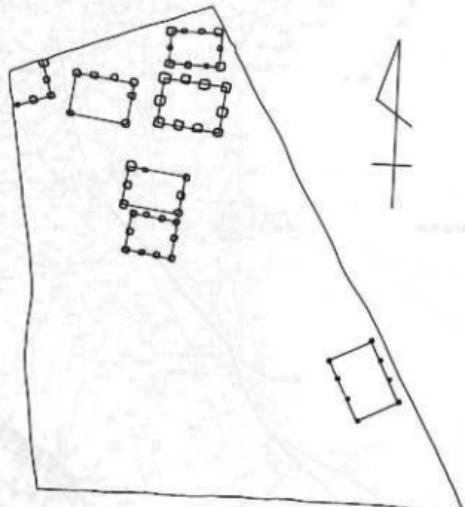
金蔵寺下所遺跡

約2年間に及ぶ調査が終了した。確認した遺構は縄文時代晚期から鎌倉時代にわたる。なかでも奈良時代の遺構が中心となる。

奈良時代の遺構としては、建物群、N30°Wの主軸方位、あるいはそれに直交の主軸方位をもつ溝状遺構などがあり、また自然河川も検出した。自然河川は最大幅約20m、最深部は3mをこえる。総延長約200mにわたって発掘したがこの自然河川がとり囲む微高地に建物群、溝状遺構が広がる。建物は2×3間の規模のものが多く3×3間、2×2間、1×3間、の規模のものもみられる。主軸方位は溝状遺構と同じくN30°Wの方位をとるもの、真北方向のもの、あるいは不規則なものがある。各建物遺構の重複もあり数回にわたる建て直しが考えられる。N30°Wの主軸方位をもつ溝状遺構は奈良時代を中心とした時期の遺物を出土するものと平安時代後半を中心とした時期の遺物を出土するものがあ



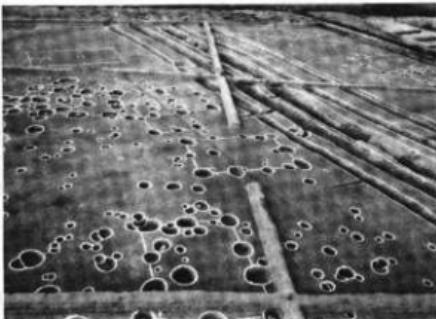
第1図 I区西半部建物群



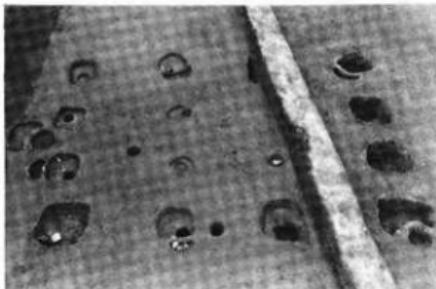
第2図 I区西半部建物群

る。

2年間の調査でコンテナ200箱程度の遺物を検出した。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、輸入磁器などである。なかでも奈良時代から平安時代にかけての土師器、須恵器類が多い。土師器の中には自然河川より出土した赤色顔料を塗布した土器もある。この他、自然河川より斎串、木製模造品（刀形、人形、舟形、馬形）など祭礼に使用したと考えられる遺物が多数出土している。



第3図 I区東半分建物群



第4図 建物址



第5図 I区東半分溝状遺構群

稻木遺跡 B 地区

稻木遺跡B地区では、弥生時代の溝・西暦700年前後の建物群・9~10世紀の溝と建物を検出した。

なかでも中心は、西暦700年前後と推定している建物群である。

建物は調査区内で34棟検出され、このうち5棟が平安時代前半、残り29棟がこの時期に相当すると考えられる。

この29棟については、重複・建て替えがあり、数時期に分けられる可能性が高いが、この点について現在検討中である。

29棟中柱建物は7棟あり、倉庫の可能性が高いと考えている。

建物の規模は

1×1間が1棟 3×3間が1棟

2×2間が4棟 3×4間が1棟

3×2間が14棟

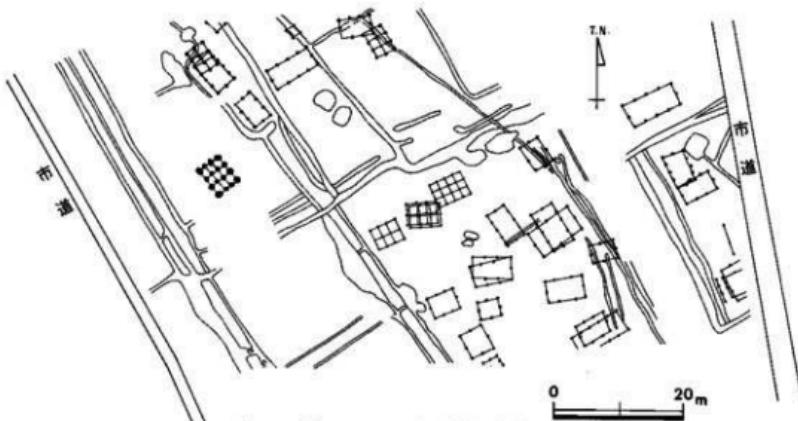
4×2間が7棟

5×2間が1棟

である。

この建物群以外に検出された遺構として、溝50・土坑30がある。土坑中には弥生時代末~古墳時代初めに位置付けられるものが4ヶ所ある。

遺跡の範囲は、現状の地形からすれば、北へ20m、南へ数十mの広がりが予想される。

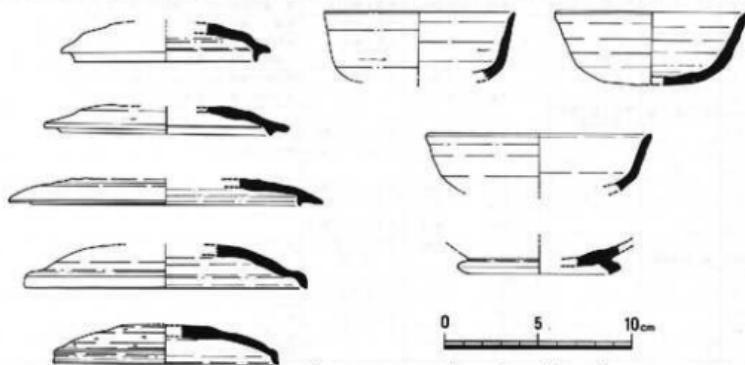


第1図

B3地区遺構配図



第2図 B3地区全景



第3図 出土遺物

稻木遺跡 C 地区

遺跡は、弥生時代後期の集落跡と墳墓、古墳時代後期～平安時代の集落跡を内容とする複合遺跡である。遺構は、弥生時代後期の竪穴住居跡 5 棟、石積みの墓 7 基、土壙墓 3 基、壺棺墓 8 基等、古墳時代後期～平安時代の堀立柱建物跡 5 棟等がある。遺物は、多量の弥生土器、土師器、須恵器、鉄器、鏡片、管玉等がある。



第1図 弥生時代後期末の主な遺構配置略図

遺構番号	遺構の種類	形 状	規 模	方 向	備 考
SB-01	竪穴住居跡	圓丸方形	5.2×4.7m		柱穴4基石2等が出土、抜け落ちた建築物が残っていた。
SB-02	"	"	4.8×4.2m		柱穴4
SB-03	"	"	5.4×5.3m		柱穴4、炭化物
SB-04	"	"	3.8×3.4m		柱穴4
ST-01	石積みの墓	不定形	最大径2m、高さ0.3m	南東～北西	墓壇(大1.3m×1.5m×小0.8m×0.8m)抜製埴輪出土。
ST-02	"	方 形	π 4m, H 0.4m		墓地未検出
ST-03	"	"	π 3m, H 0.3m	南東～北西	墓壇(2.06m×1.06m)
ST-04	"	"	π 5m, H 0.2m		跡跡7点を例取。埋められた土器の集中帯がある。
ST-05	"	不定形	π 2m, H 0.3m		小規模、石積みの面下に埴土器を検出。
ST-06	"	"	π 3m, H 0.2m	東～西	横円形の墓壇(直径2.1m)。土器の集中部がある。
ST-07	"	"	π 4m, H 0.1m		追葬状況が悪い。墓壇(2.8m×2.1m)
ST-08	壺棺墓	壺棺墓主部と副部			
ST-09	"	"			
ST-10	"	"			
ST-11	"	"			
ST-12	"	"			
ST-13	"	"			
ST-14	"	"			
ST-15	"	"			
ST-16	"	"			
ST-17	"	"			
SK-01	堀立柱建物跡	円 形	径25cm、深さ21cm	N-34°-W	
SK-02	"	"		X-67°-E	
SK-03	"	"		N-39°-W	
SK-04	"	"		N-24°-W	縦 柱
SK-05	"	"		N-35°-E	縦 柱
SK-06	"	"			網鉄「承和昌宝」5枚を納めた上部器の蓋を埋置。

第1表 主な遺構一覧表



写 真 (1)



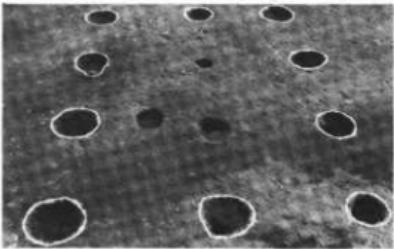
写 真 (2)



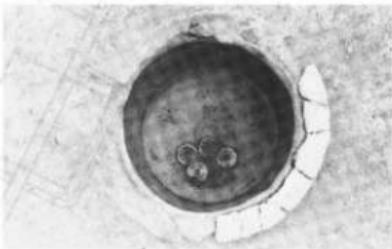
写 真 (3)



写 真 (4)



写 真 (5)



写 真 (6)

竪穴住居跡（写真1）は、砂礫層を隅丸方形に約30cm掘りくぼめたもので、床面には、当時、使用されていた土器や磁石などがあった。また、火災で焼け落ちた建築材が残っていた例もある。石積みの墓は、石と土器、及び土を積み上げて作られた高まりとして現れる（写真2・3）。石は付近にある河原石を使用し、土器は弥生時代後期の壺・甕・高杯・鉢形土器などのほかにミニチュア土器も含まれている。高まりの下からは土壤が検出され、土壤内からは施や桃核などが出土した。壺棺墓（写真4）は、口頸部を打ち欠いた大型の壺を棺身とし、また大型の鉢を蓋としてそれらを合せ口にして遺体を納めたものである。

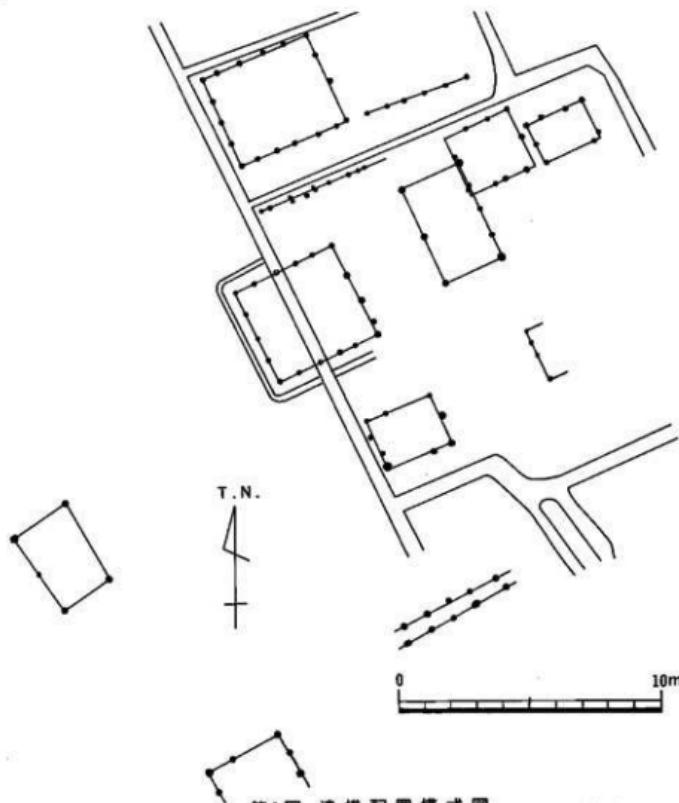
写真5は、古墳時代後期～平安時代の掘立柱建物跡である。近くに、銅錢「承和昌宝」（初鋤年、835年）を納めた土師器の甕が埋められている場合もあった（写真6）。

中村遺跡

中村遺跡では、遺構面2面、三時期の遺構が検出された。

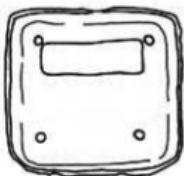
弥生時代には、自然河川（幅約10m・深さ約1.5m）とこれに併存する溝状遺構（幅約0.8m・深さ約0.5m）が検出されている。埋土最上層に弥生土器（時期不明）を包含することから、埋没年代は弥生時代のある時期と推定される。

次に、平安時代前半（9～10世紀）に埋没した溝が二ヶ所で検出された。方向は、真北から西へ約30°振っており、溝間距離は約106mを計る。埋土は砂で形成されており、平安時代前半には廃棄されたものと推定される。また、埋土の中から銅印（私印「貞」）と銅製帶金具巡方が出土している。

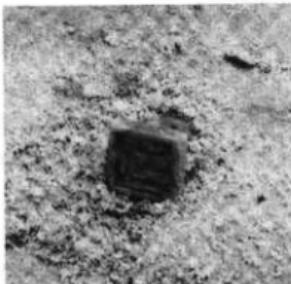
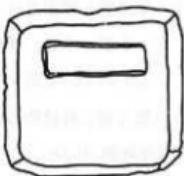


第1図 造構配置模式図

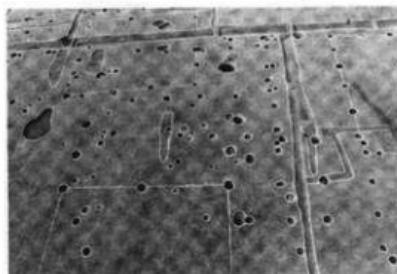
次に、室町時代後半に推定している掘立柱建物が数棟ある。現在検討中であり詳細は報告書にゆずるが、溝と掘立柱建物・土坑が検出された。遺構配置図は、中村遺跡の中心部模式図であり、今後の検討をへて一部改変する可能性がある。



第2図 帯金具実測図（1/1）



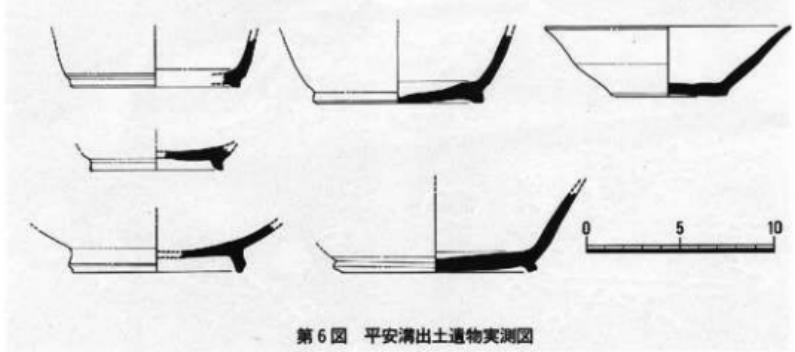
第3図 銅印出土状況



第4図 建物址（東から）



第5図 建物址（東から）



第6図 平安溝出土遺物実測図

吉原 A 地区矢ノ塚遺跡 南部地区

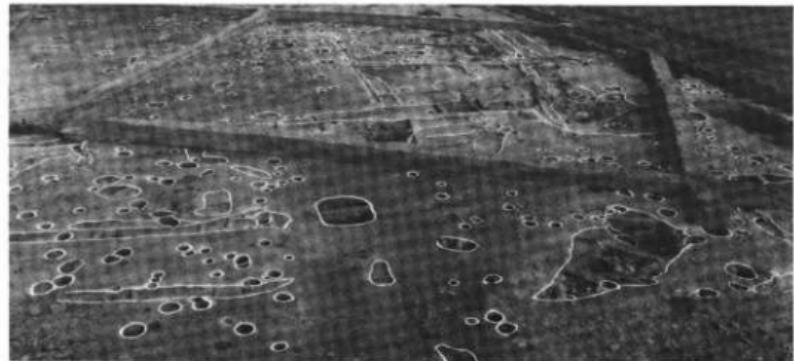
今年度実施した予備調査の成果にもとづき昭和59年10月16日から昭和60年2月20日にかけて、矢ノ塚遺跡の南部地区で発掘調査を実施した。対象面積は2,300m²、実質発掘面積は1,920m²である。

調査対象地の全域に及び室町時代を中心とする集落跡が検出された。確認した遺構には、素掘りの井戸2基、建物の柱穴と考えられる多数のピット群、土坑、建物をめぐると考えられる浅い溝状遺構等がある。建物の規模は現在確認しているもので、2間×4間のもの1棟・2間×3間のもの2棟であるが、柱穴数からすればかなりの数の握立柱建物の存在が推定される。検出した溝や建物は、現在の丸龜平野西部に認められる条里地割方向と一致し、真北から西に30°偏った方位を基準とする。

出土した土器は、土師器の皿・土鍋・羽釜などの日用雑器類を中心で、磁器類、瓦器類は殆ど含まれない。また出土古銭は北宋錢を中心とし、一部明錢が含まれる。

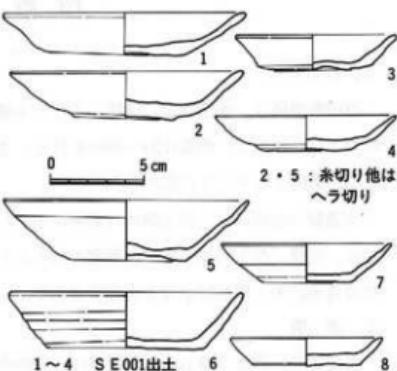


遠 景（北から）



南部調査区（西から）

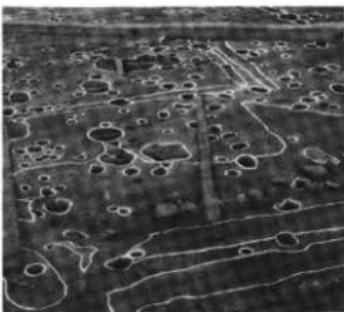
矢ノ塚遺跡南部地区は、北に近接する天霧山からの谷筋と南の二反地川の間の狭い台地上に立地する。引き続き実施している北部地区的発掘調査では弥生時代中期後半・奈良～平安時代にかけての遺構が検出されているが、南部地区では、同時代の遺構は認められない。地形的な制約はあるものの北部地区的奈良～平安時代の建物の基準軸が、丸亀平野西部の地割方向と一致しない点は、当地域の条里施行時の状況を推定する上で貴重な資料とすることができよう。また南部地区で出土した土師器は、昭和56年度に実施した天霧城跡東方尾根発掘調査で出土したものと著しく類似する点も注目される。



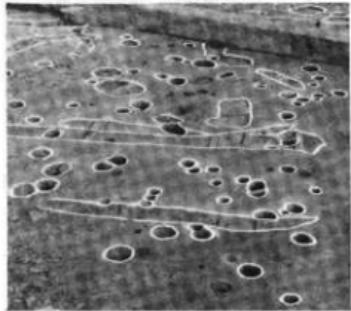
矢ノ塚遺跡南部地区出土 土師器



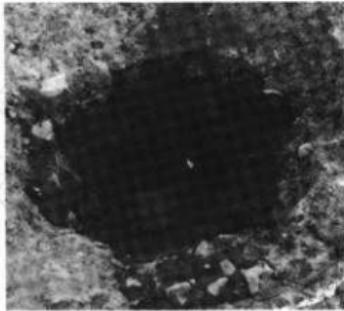
H-4区（北から）



G-5区（南から）



D-5区（西から）



G-5区 井戸

西碑殿遺跡

1. はじめに

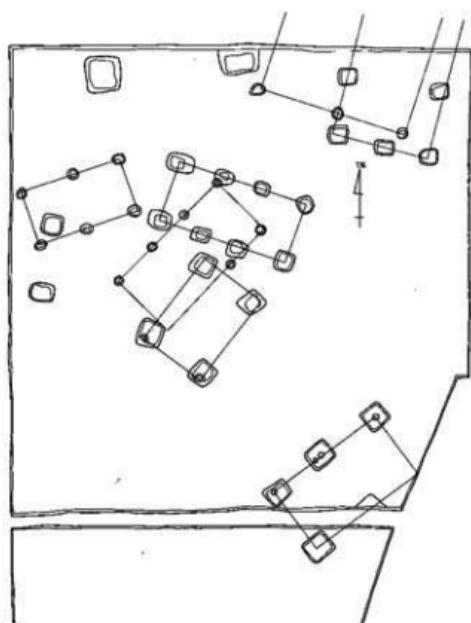
西碑殿遺跡は、普通寺市の西端にあたる天霧山南麓の谷あいに位置し、そこに形成された扇状地の上に立地する。標高は34~39mを計る。また、扇状地の西方には丘陵が伸び、標高50m附近には、東向きにテラスが広がる。

当遺跡の北西には、弥生時代の銅劍が出土したと伝えられる弥谷山遺跡（注1）が、また南方には、同様に弥生時代の銅劍、銅鐸が出土した我拝師山遺跡（注2）が存在し、さらに東方では、吉原A地区矢ノ塚遺跡が現在発掘中である。

2. 遺構

今までの調査で検出された遺構は、建物跡6棟をはじめ、多数のピット、土坑などがある。

6棟の建物のうち現在規模の確認できるものは、



第1図

注1 藤 貞幹「好古日録」1795年ほか

注2 石川 嶽・松本豊胤「日本考古学協会第32回総会研究発表要旨」1966年ほか。

SB 8502-1間×3間
SB 8503-1間×1間
SB 8504-1間×2間
SB 8505-1間×2間
SB 8506-1間×3間

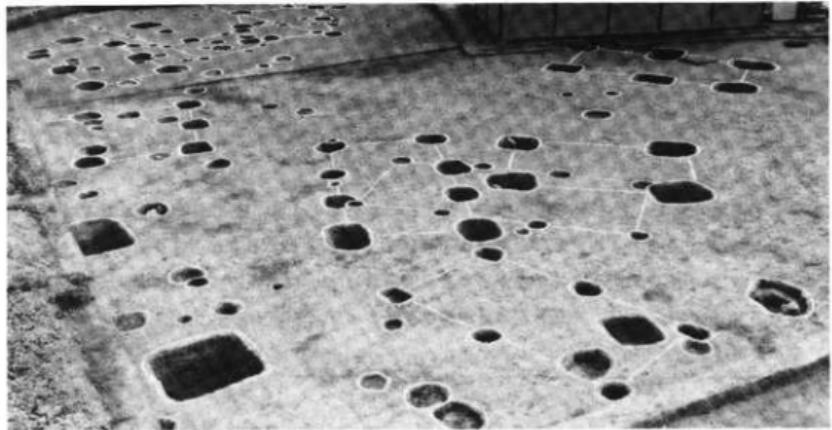
である。

土坑のうちSK8501は、直径160cm・深さ80cmを計り、SK8502は、直径160cm・深さ70cmを計る。

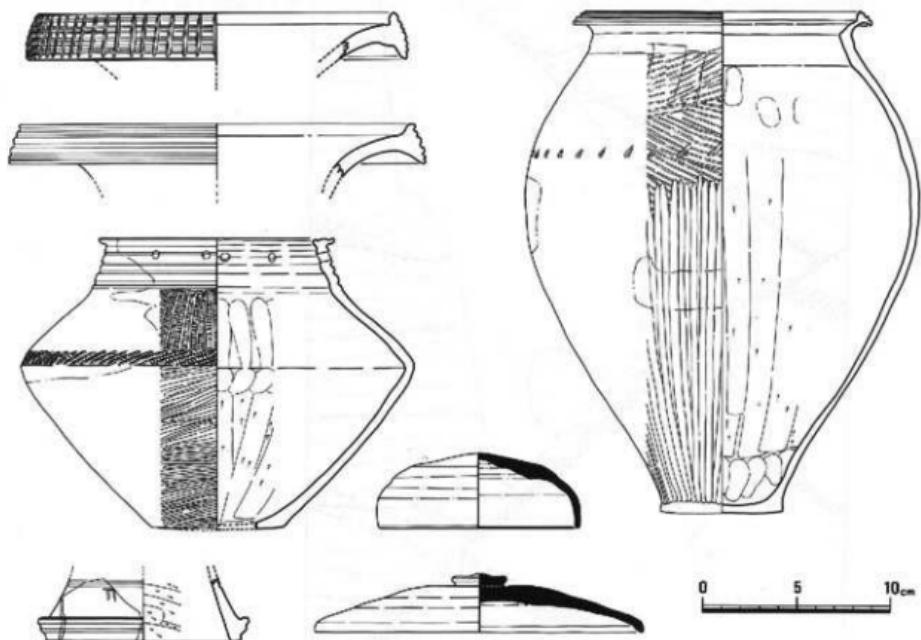
遺構は、遺物包含層の下層の地山に掘り込まれているが、その時期については、現在検討中である。

3. 遺物

地表下第4層に、黒色粘質の遺物包含層があり、弥生土器と須恵器その他が出土した。



第 2 図

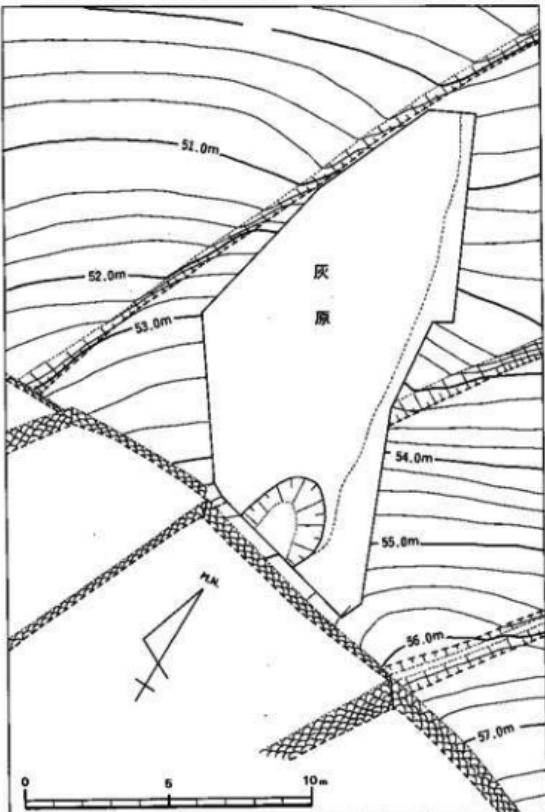


第 3 図

道免1号窯跡

三野町の火上山西裾から南西裾にかけては、総数6基の窯跡が存在し三野古窯跡群として周知されている。県教委はその地域近辺に計画されている横断道路建設路線上の遺跡の有無等を重機(ユンボ)を用いて調査した。その結果、火上山西裾の北向き斜面で窯跡灰原跡を検出し、須恵器片をコンテナ10箱採取した。そこで10月9日～10月23日(実働9日間)で発掘調査を実施した。

発掘調査は、南北に1本、東西に3本の畦畔を残し、土層を確認しながら掘り進めた。しかし、土層はかなり擾乱されており当地がかつて果樹園造園のため開墾されたことを示唆していた。そのため本来の灰原の範囲、堆積状況等は把握できなかった。発掘区南端で検出した土坑もその南部が未買収地区のため全容は明らかにできなかった。埋土は褐黒色粘質土で深さ40cmを計測した。



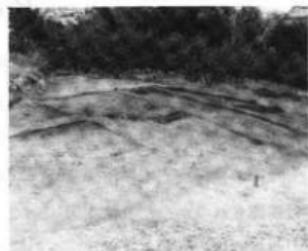
なお窯体は未買収地に存在すると思われる。

窯の操業時期は出土遺物から7世紀前半頃と考えたい。

第1図 地形測量・造構配置図



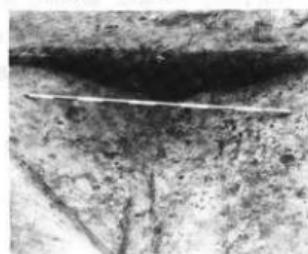
第2図 調査風景



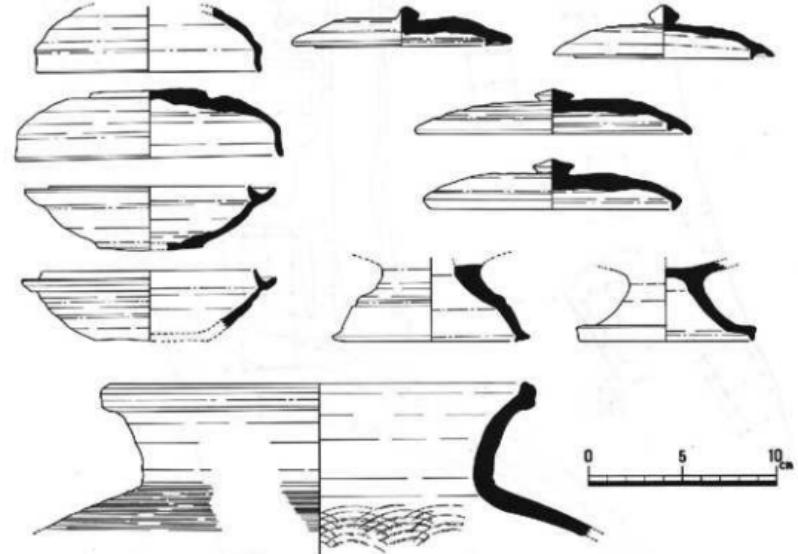
第3図 遺物の広がり



第4図 遺物の広がり



第5図 土坑



第6図 出土遺物実測図

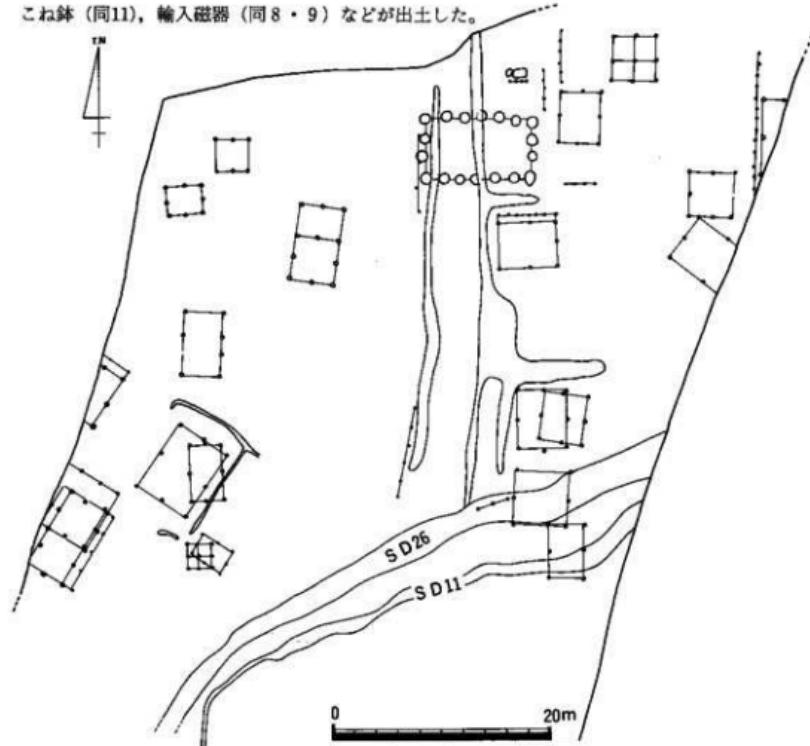
延命遺跡（城岡地区）

三豊平野を西北流する財田川と宮川に挟まれた独立低丘陵の西北端に延命遺跡城岡地区は所在する。古くから「城岡（じょのおか）」と呼ばれてきたこの地は、戦国時代の香川石馬助の拠城である高野城に関係がある土地と考えられてきた。

今回の発掘調査では、弥生時代および鎌倉時代の遺構が検出されたが、高野城に関連する遺構は確認されなかった（第1図）。

弥生時代の遺構としては、この独立低丘陵をとり囲んでいると思われる環濠の一部が検出された（第1図）。この溝は、幅3.0m、深さ1.3mのV字溝で、弥生時代後期後半～庄内式併行期と考えられる土器が多量に出土した（第4・5図）。

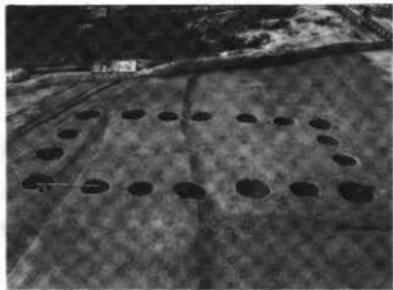
鎌倉時代の遺構としては、掘立柱建物21棟、柵列などが確認された（第2・3図）。遺物は、土師器小皿・壺（第6図 1～4, 7）、畿内産の瓦器（同5, 6）、九州産の石鍋（同10）、東播系のこね鉢（同11）、輸入磁器（同8・9）などが出土した。



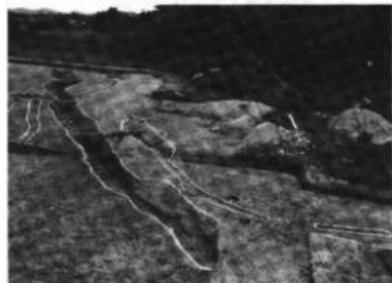
第1図 延命遺跡 城岡地区遺構配図



第2図 挖立柱建物群



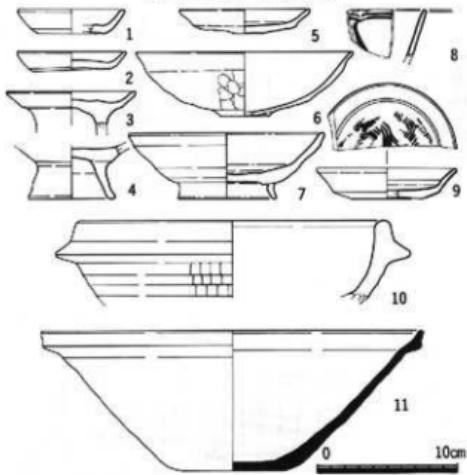
第3図 巨大な柱穴を持つ掘立柱建物



第4図 弥生時代溝



第5図 弥生時代溝土器出土状況



第6図



第7図 弥生土器

延命遺跡（八反地地区）

1. 調査の概要

八反地地区は、県道羽方・豊中線と宮川の間に広がる標高約20mの丘陵状の地形に立地する。主として、建物跡・井戸跡及び溝状遺構を検出した。遺構の時期は、弥生時代末～古墳時代初頭と平安時代末～鎌倉時代に2分できる。江戸時代後半のものも検出したが、遺構面は、他と同一である。

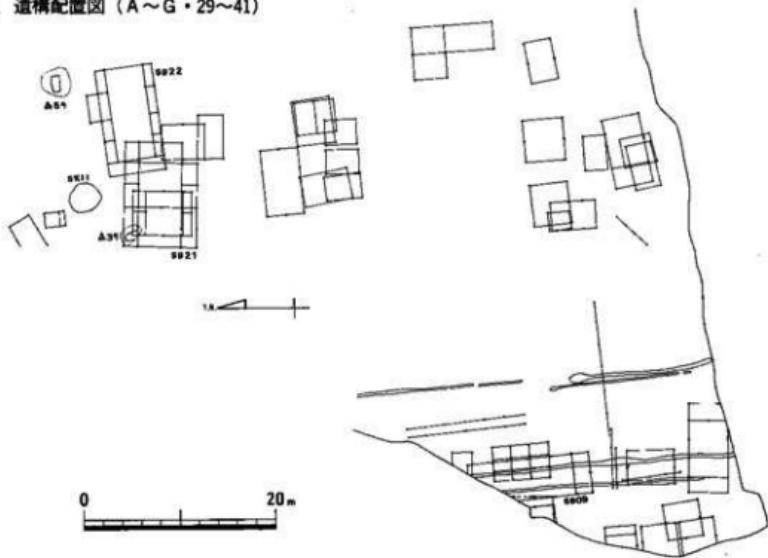
弥生時代末～古墳時代初頭

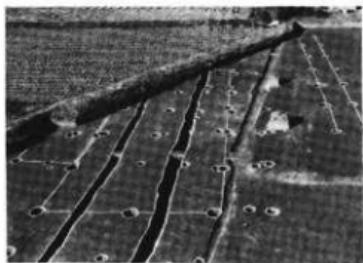
調査区北半を中心として、おびただしい土器が出土する溝状遺構を5本検出した。

平安時代末～鎌倉時代

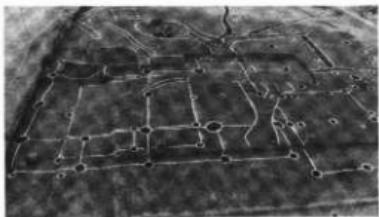
調査区南半を中心として、約50棟の掘立柱建物群と井戸跡を検出した。母屋と想定できる庇付きの大きな建物を3棟(SB09・SB21・SB22)確認できる。SB21の北の土坑(SK11)からは13世紀中頃の瓦器・土師器が完形で、30m東のくりぬき井筒を有する井戸跡(SE01)からも同時期の瓦器が、それぞれ出土した。SE01の北北西80mで検出した井戸跡(SE02)は、3段の曲物を伴っていた。

2. 遺構配置図 (A～G・29～41)





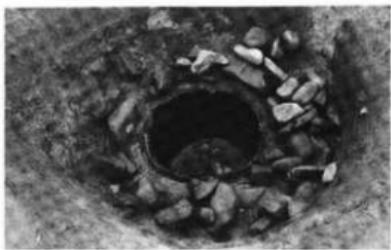
S B 09 (南から)



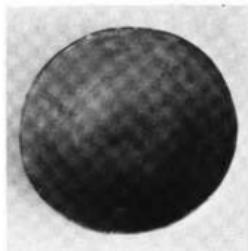
S B 21 (南から)



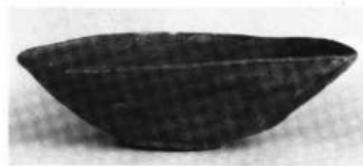
S K 11 土器出土状況



S E 01



S E 02



S K 11 出土瓦器 (S K 11-3)



S K 11 出土土師器 (S K 11-8)

四国横断自動車道建設にともなう
埋蔵文化財発掘調査実績報告書

1985年3月30日

発行 香川県教育委員会

印刷 成光社